

〈研究報告〉

よい体育授業に対する認識の育成を目指した模擬授業の成果

—授業映像視聴による省察の変容—

藤田 育郎 信州大学教育学部スポーツ科学教育講座

キーワード：基礎的条件, 内容的条件, e-Learning

1. はじめに

近年、教員養成・採用の場においてキーワードになっている実践的指導力を育成する手法として、教員養成系の大学・学部では、模擬授業を積極的に実施している。体育・保健体育科においても、全国の教員養成大学・学部 63 校を対象とした三木ほか (2004) による調査で、約 3 割に当たる 19 校で模擬授業が実施されていることが報告されている。加えて、ここ数年では、模擬授業に関する研究成果が学術誌等で数多く報告されるようになってきた。模擬授業を経験することによって獲得・向上が期待できる成果として、①教授技術、②授業を省察する力、③体育授業の実施に必要な知識や能力、以上 3 つを挙げることができると (木原, 2010; 藤田, 2011)、これらは模擬授業を実施するにあたってのねらいや目標として設定されるものでもある。

しかし、計画・立案した模擬授業を実施し、振り返りを行った上で授業改善の方略を検討するという一連の手続きを考えると、教員養成カリキュラムにおける限られた授業時数で十分な成果を保障することは困難であると考えられる。特に、実施した模擬授業の映像視聴を行うことは、教授技術の改善に有効であるという梅垣 (2007) の指摘にみられるように、振り返りを行う過程では、授業映像を視聴することが求められるために多大な時間を要する。また、模擬授業を実施した翌週の授業で授業映像を視聴しながら振り返りを行うという形式 (福ヶ迫・坂田, 2007) の場合、振り返りが即興的な印象評価に陥りやすいという課題も存在すると考えられる。

このような課題を解決するための 1 つの方略として、授業時間外を活用した省察課題の提供が考えられる。例えば、松野ほか (2011) は、LMS (Learning Management System) を用いて模擬授業の動画配信を行い、受講生同士で模擬授業に対するコメントを入力し、評価し合う活動を授業時間外の課題として提供している。その結果、授業時間外を活用した動画配信による評価活動といった課題は、自学自習を促進するとともに時間的な制約を軽減することになるとして、その効果を認めている。また、体育教師教育の領域においては、鬼澤ほか (2012) が模擬授業の動画配信を行い、授業外の時間を活用して振り返りを行うといった手法に試みている。その結果、映像視聴による振り返りを受講生の多くが肯定的に捉えているとともに、授業を客観的に観察できることや模擬授業を経験した受講生

の印象以上に反省点が浮き彫りになることを映像視聴による振り返りの効果として挙げている。しかし、鬼澤ほか（2012）による研究では、「授業の分析・評価（省察）」を目標として定めているものの、授業映像の視聴といった課題を遂行することによって、受講生の省察内容がどのように変容しているかということについては具体的な言及がみられない。したがって、藤田（2011）が指摘するように、模擬授業の目標・内容・手法に整合性を持たせ、成果検証を行う必要があると考えられる。

そこで本研究では、高橋・岡澤（1994）の示す「よい体育授業を成立させる条件」^{注1}に対する認識の育成を意図して作成・編集した模擬授業の映像を e-Learning 上で視聴するという省察課題を設定し、その成果について受講生の省察の変容から明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2.1 模擬授業の概要

(1) 対象

2011 年度後期開講の中等体育科指導法演習（受講生：3～4 年生，28 名）を対象として、受講生が全 7 回の模擬授業終了後に作成した振り返りシートを分析した。なお、データの信頼性を保つために、分析対象は振り返りシートを毎回提出した 20 名，計 140 枚の振り返りシートに限定した。

(2) 中等体育科指導法演習の概要

中等体育科指導法演習の授業では、体育授業にかかわる実践的な指導力を育成することをねらいとして、実施した模擬授業を教師役、児童・生徒役、観察者役といった多角的な視点から振り返り、よりよい体育授業の実現へ向けた授業改善の糸口を見出すことを主な課題としている。また、模擬授業を実施した後は、筆者が作成・編集した模擬授業のダイジェスト映像を e-Learning 上で視聴し、振り返りシートを作成するという授業外の時間を活用した省察課題に取り組むこととしている。

表 1 中等体育科指導法演習の授業展開

回	授業内容
1	グループ分け，担当教材の決定，役割分担
2	授業分析・授業評価の手法
3	教材づくりと模擬授業のリハーサル①
4	教材づくりと模擬授業のリハーサル②
5	模擬授業①：ボール運動（ベースボール型）：小学校6年生
6	模擬授業②：ダンス（現代的なリズムのダンス）：中学校2年生
7	授業研究会：模擬授業①，②について
8	模擬授業③：体づくり運動（多様な動きをつくる運動）：小学校4年生
9	模擬授業④：ボール運動（ネット型）：小学校6年生
10	模擬授業⑤：ボール運動（ゴール型）：小学校6年生
11	授業研究会：模擬授業③，④，⑤について
12	実技（担当教員による実技指導の補足）
13	模擬授業⑥：陸上競技（走り高跳び）：中学校2年生
14	模擬授業⑦：器械運動（マット運動）：中学校2年生
15	授業研究会：模擬授業⑥，⑦について

(3) 中等体育科指導法演習の授業展開

中等体育科指導法演習の授業展開は、表1に示したとおりである。1回の模擬授業は45分または50分とし¹²⁾、教師役グループのうち、教師役として授業を実施する者以外は、観察者役としてビデオ撮影および組織的観察法（期間記録法と相互作用行動記録法）による授業分析を行った。また、模擬授業を2回または3回実施することによって授業研究会を実施し、授業映像や観察・評価データに基づいて、授業改善に向けた方略を検討する機会を設けた。図1は、今回実施した模擬授業の一連の流れを示している。

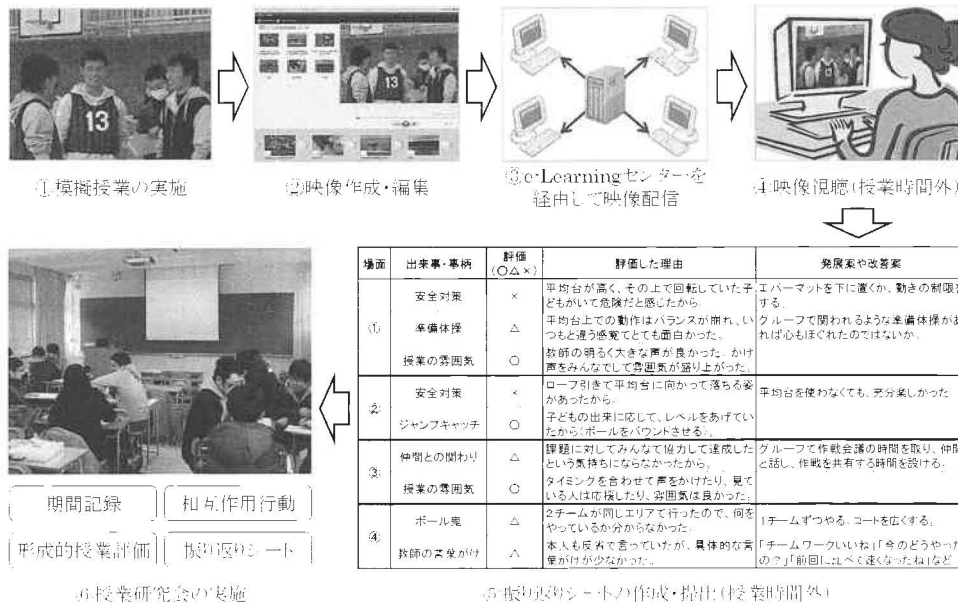


図1 模擬授業から授業研究会までの一連の流れ

(4) e-Learning を活用した省察課題の提供

中等体育科指導法演習では、授業外の時間を活用して、筆者が作成・編集した模擬授業のダイジェスト映像を視聴しながら振り返りシートを作成することを課題としている。本研究では、そのダイジェスト映像を信州大学 e-Learning センター長野分室のサーバーを介してストリーミング配信した。なお、ダイジェスト映像の作成・編集にあたっての留意事項は、後述するとおりである。

また、図2には、ダイジェスト映像を視聴しながら受講生が作成する振り返りシートのフォーマットを示した。この振り返りシートは、筆者による先行研究（藤田ほか、2011）でも用いられており、一定の有効性が認められるものである。受講生は、このフォーマットに従って、模擬授業の中で生じた出来事を取り上げ、それに対する評価、評価した理由、発展案や改善案を対応させて記入することになっている。

場面	出来事	評価 (○△×)	評価した理由	発展案や改善案
①				
②				
③				
④				

図2 振り返りシートのフォーマット

(5) ダイジェスト映像の作成・編集にあたっての留意事項

毎回の模擬授業終了後に受講生が視聴するダイジェスト映像の作成・編集にあたって留意した事項は、以下の3点である。

①受講生の負担考慮

授業外の時間を活用することによる受講生の負担を考慮し、45分または50分の授業を10～15分程度の映像に編集した。

②授業のストーリー性の確保

授業の展開過程（教材や学習課題のつながり）が損なわれないように配慮しながら、4つの場面（導入→展開①→展開②→まとめ：各場面3分程度）で構成した。特に、ダイジェスト映像を視聴することによって、実施した模擬授業を想起できるように配慮した。

③よい体育授業に対する認識の向上を促す場面の抽出

高橋・岡澤（1994）が示す「よい体育授業を成立させる条件」の基礎的条件および内容的条件に対する認識の育成を意図して場面を抽出した。具体的には、次に示すような場面を中心に抽出した。

【基礎的条件】

例：教師役がよいかかわりをした場面

教師役が改善すべきかかわりをした場面

【内容的条件】

例：児童・生徒役の成功体験がみられる場面

児童・生徒役のつまずきが見られる場面

2.2 分析方法

(1) 本研究における省察の位置づけ

秋田（1996）は、省察を「何が問題であるのかを明らかにし、問題解決という目的に照らして、手段としてどの授業行動がふさわしいかということ仮説としてあれこれ考えをめぐらせる手段-目的分析を行い、それを実際に検証していく探究の過程」としている。この秋田（1996）による省察の位置づけに鑑みると、本研究で使用した振り返りシートでは、模擬授業の中で生じた出来事について評価した理由を記し、発展案や改善案を提起するところに授業を省察するという思考が表れるものと考えられる。本研究では、分析の都合上、受講生が記入した振り返りシートにおける評価した理由欄に限定し、そこにみられる記述内容の変容を明らかにしていくこととした。

(2) 記述内容の分析手続き

先述したように、受講生が視聴する模擬授業のダイジェスト映像は、高橋・岡澤（1994）が示す「よい体育授業を成立させる条件」の基礎的条件および内容的条件に対する認識の育成を意図して作成・編集している。したがって、振り返りシートにおける基礎的条件および内容的条件に該当する記述を抽出し、映像視聴を通じた省察課題を遂行することによるその変容を、分析対象者とした20名の受講生の振り返りシート1枚あたりの平均記述数から明らかにすることとした。なお、分類が困難な記述については、分析の対象からすべて除外した。

3. 結果と考察

3.1 振り返りシートにおける省察の量的変容

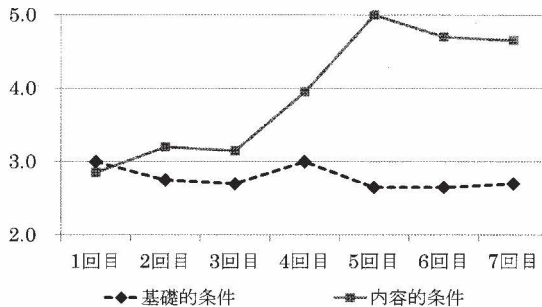


図3 振り返りシート1枚あたりの記述数 (全体)

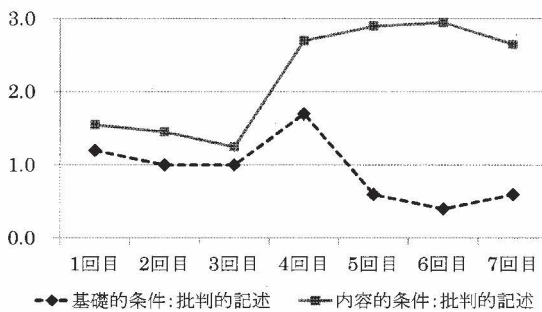


図4 振り返りシート1枚あたり記述数 (批判的記述)

図3は、振り返りシートの評価した理由欄において、基礎的条件および内容的条件に分類された記述数の変容を示したものである。全7回の模擬授業を通して、基礎的条件に該当する記述に大きな変容はみられなかったが、内容的条件に該当する記述に増加がみられた。

また、図4は、図3に示した記述の中で、評価として△または×をつけた批判的な記述を抽出し、その変容を示したものである。全7回の模擬授業を通して、基礎的条件に対する批判的な記述は、第4回目を除いて概ね減少傾向にあったのに対して、内容的条件に対する批判的な記述が増加する傾向がみられた。つまり、

模擬授業および省察課題を繰り返し行うことによって、振り返りを行う際の着眼点や授業改善の問題意識が教材や学習課題といった授業の内容的な部分へ移行していくという傾向がみられた。これには、いくつかの要因が考えられる。

一点は、模擬授業を重ねることによって、教授技術に改善がみられたと考えられることである。長谷川 (2003)、日野 (2004) は、模擬授業の進行に伴って時間管理 (マネジメント) や相互作用行動といった基礎的条件に該当する教授技術に向上がみられたことを報告している。本研究においても、基礎的な教授技術に改善がみられているとすれば、振り返りを行う際の着眼点が模擬授業の進行に伴って授業の内容的な部分へ移行したと考えられる。この点については、図4に示したように基礎的条件に対する批判的な記述が概ね減少傾向にあったのに対して、内容的条件に対する批判的な記述が増加する傾向であったことから解釈することができる。もう一点は、受講生が教師役あるいは児童・生徒役として体験した模擬授業について、映像を通して客観的な視点から観察するという課題を繰り返し行ったことである。鬼澤ほか (2012) は、授業を客観的に観察できることや模擬授業を経験した受講生の印象以上に反省点が浮き彫りになることを映像視聴による振り返りの効果として挙げている。本研究においても、映像視聴による省察課題を繰り返し行うことによって、授業を振り返る視点が教師行動にとどまらず、教材や学習課題といった授業の内容的な部分にまで広がりをもせたと考えられる。なお、この点については、次節「振り返

りシートにおける特徴的な記述からみた省察課題の効果」の「実際の学習活動から見た目標 - 内容 - 方法に対する理解」の項において、より詳細な考察を加えたい。

3.2 振り返りシートにおける特徴的な記述からみた省察課題の効果

続いて、振り返りシートにみられた特徴的な記述を取り上げ、授業映像を視聴することによる省察課題の効果という点について、(1) 他者に対する教師役のかかわりから得た気づき、(2) 実際の学習活動から見た目標 - 内容 - 方法に対する理解、以上2つの視点から検討する。

(1) 他者に対する教師役のかかわりから得た気づき

図5は、模擬授業第3回目の小学校4年生を想定した体づくり運動の授業における児童役を受講生Fの振り返りシートから抜粋した記述である。大縄跳びを跳びながらボールをキャッチするという課題に対して消極的になっている児童役の女子学生Kと教師役学生とのやり取りの場面を取り上げている。また、図6は、模擬授業第1回目の小学校6年生を想定したベースボール型の授業における児童役を受講生Yの振り返りシートから抜粋した記述である。打撃動作における腰の回転と引き手(右打ちであれば左手)の使い方を意識するためのfrisbeeを投げるという課題がなかなか上手にできない児童役の女子学生Hに対して、教師役学生がアドバイスを与えた場面を取り上げている。

【出来事】	Kさんに対する言葉かけ	【評価】	△
【評価理由】	Kさんは、「絶対できない!」と言っていたので、もっと教師から肯定的な言葉かけをしてあげて欲しかったから。		
【改善案】	「大丈夫」「やってみよう」という励ましや、少しでもできたら「いいね」や「できるじゃん」と誉める。また周りの子どもたちと一緒に言葉かけをする。		

図5 受講生Fの記述(模擬授業3回目)

【出来事】	Hさんへのfrisbee投げのアドバイス	【評価】	×
【評価理由】	Hさんに対し、実際に教師がfrisbee投げを行って見せている場面で、「このように投げるんだよ」と言ってすぐにその場から去ってしまっている。		
【改善案】	そのあとの子どもの動きまで見てコメントをしてあげると、より子どもが達成感を感じられるのではないか。		

図6 受講生Yの記述(模擬授業1回目)

どちらの記述も、振り返りシートを作成した受講生自身が直接体験した場面ではないが、教師役の相互作用行動(かかわりや言葉かけ)について、共通した問題意識が表れている。このような記述は、教師役学生の相互作用行動を客観的な視点から眺めてみることで得られた気づきであると考えられる。図5、6に示した記述の事例で考えると、技能が低いあるいは運動が苦手な児童・生徒に対してどのようにかかわり、どのような言葉かけをしてあげればよいのか、映像視聴という省察課題を通して、実際に指導する側に立った際、このような場面に出会ったら自分であればどうするのかということに思考を巡らせる一つの

契機になり得るものであると考えられる。「よい体育授業を成立させる条件」(高橋・岡澤, 1994)の基礎的条件である授業の肯定的な雰囲気を生み出す教師の相互作用行動に対する認識を育成するにあたって、映像視聴による省察課題を提供することが効果的であるということが、このような記述の事例から明らかになったと考えられる。

(2) 実際の学習活動から見た目標 - 内容 - 方法に対する理解

下の図7は、模擬授業第4回目の小学校6年生を想定したプレルボール^{註3)}の授業において、教師役グループが考案したゲームのルールを示したものである。

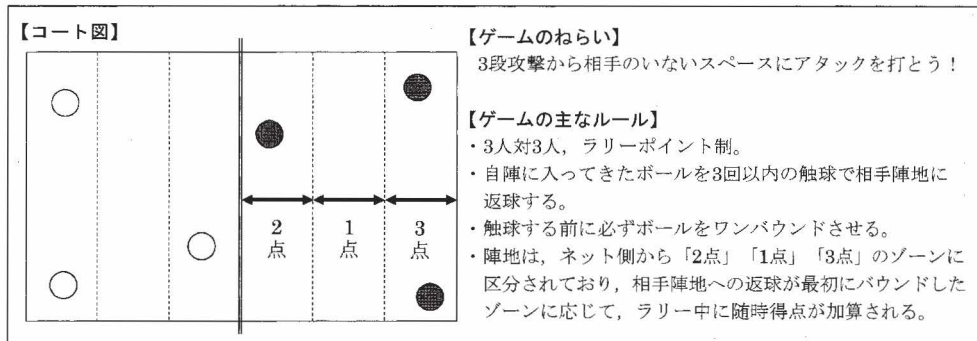


図7 模擬授業第4回目：プレルボールのルール

ゲームの目標、つまりゲームで身につけさせたい内容を「3段攻撃(チームの連係)から相手のいないスペースへアタックを打つこと」と定め、その習得に向けた教材として図7のようなゲームを設けている。また、「相手陣地に返球した位置に応じて得点ゾーンを設けていること」「相手陣地に返球することでラリー中でも得点が加算されること」の2点が、教師役グループが考案したこのゲームのルール上の工夫であるといえる。

模擬授業では、非常に白熱したゲームが展開され、模擬授業の直後に児童役の受講生を対象に実施した形成的授業評価法^{註4)}による調査では、特に「成果」次元において、実施した全7回の模擬授業のうち2番目という評価を得た授業であった。したがって、児童役の受講生は、このゲーム教材に対して肯定的な印象を持つとともに、学習の成果を実感していたものと考えられる。しかし、受講生が授業映像を視聴して作成した振り返りシートには、このゲーム教材に対して図8、9のような記述がみられた。

【出来事】	3対3のゲーム	【評価】	△
【評価理由】	アタックをすることで得点がどんどん入っていくルールはいいとは思ったが、空いているスペースを見つけることより、遠くへ飛ばすことにみんなの意識が向いてしまっていた。		
【改善案】	相手に触られずに2バウンド目までしたら得点が倍などのルールだと相手に触られないようなコースを見つけようとするのではないかな。		

図8 受講生Sの記述

【出来事】	ゲーム	【評価】	△
【評価理由】	楽しんでやっているが、アタックというよりも「当てて狙った所に落とす」というようになってしまっている。子どもたちの打ち方がアタックから離れてしまっているように感じたため。		
【改善案】	子どもに求める運動技能のレベルが高い。スペースを見つけて狙うことが目的であれば、線で分けるのではなく、「アタックで相手が取れなかったら2点」という分かりやすいルールにする方が適当ではないか。		

図9 受講生Hの記述

図8の受講生Sの記述では、このゲームを「△」と評価した理由として、相手がいない「空いているスペースを見つける」ことよりも「遠くへ飛ばすこと」、つまり相手陣地後方の3点ゾーンをめがけて遠くへアタックを打つという児童役の姿が多く見られたことに着目している。また、図9の受講生Hの記述では、このゲームを「△」と評価した理由として、「当てて狙ったところに落とす」、つまりそれまでの展開で学習した3段攻撃（チームの連係）によるアタックではなく、相手陣地前方の2点ゾーンや後方の3点ゾーンに返球することで得点を稼ぐというような「子どもたちの打ち方がアタックから離れてしまっている」活動が多く見られたことに着目している。両者の記述に共通していることは、「3段攻撃（チームの連係）から相手のいないスペースへアタックを打つこと」というゲームにおける学習目標あるいは学習内容とその習得に向けて提供された教材を照らし合わせて学習活動を観察した場合、その間に乖離が生じていたということである。

このような記述は、自身の学習活動を客観的な視点から改めて観察することによって得られた気づきであると考えられる。先述したが、この第4回目の模擬授業は、形成的授業評価で高い評価を得ており、模擬授業が終了した際の児童役の受講生の印象評価は良かったと思われる。しかし、実際の学習活動を観察・分析してみると、学習の目標-内容-方法という文脈の中で新たな気づきが生まれたということであろう。「よい体育授業を成立させる条件」（高橋・岡澤，1994）の内容的条件である学習目標や学習内容とその習得に向けた教材の関係性や妥当性に対する認識を育成するにあたって、映像視聴による省察課題を提供することが効果的であるということが、このような記述の事例から明らかになったと考えられる。

4. まとめと今後の課題

本研究では、高橋・岡澤（1994）の示す「よい体育授業を成立させる条件」に対する認識の育成を意図して作成・編集した模擬授業の映像を e-Learning 上で視聴するという省察課題を設定し、その成果について受講生の省察の変容から明らかにすることに試みた。その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 映像視聴による省察課題を繰り返すことによって、授業の振り返りを行う際の着眼点や授業改善の問題意識が教材や学習課題といった授業の内容的な部分へ移行していく傾向がみられた。

- 2) 授業映像を視聴することによって、他者に対する教師役のかかわりから気づきを得ることができ、授業の肯定的な雰囲気を生み出す教師の相互作用行動に対する認識を育成することができた。
- 3) 授業映像を視聴することによって、学習の目標 - 内容 - 方法という文脈の中で気づきを得ることができ、学習目標や学習内容とその習得に向けた教材の関係性や妥当性に対する認識を育成することができた。

以上のことから、よい体育授業に対する認識の育成を目指して意図的に作成・編集した授業映像を視聴させるという省察課題を適用することは、模擬授業の手法として効果的であるということが明らかになった。

なお、本研究で対象とした中等体育科指導法演習の授業は、教育実習を経験した3年次後期に履修するように推奨している。それは、教育実習で授業を実施するという経験を経て、授業のイメージがある程度形成された段階でなければ、目標・内容・教材・方法といった授業の内容的な部分に対する理解を促すことが困難であると考えられるからである。授業の内容的な部分に対する理解をより一層促すことが可能な模擬授業の実施方略を検討することが今後の課題として挙げられる。

注

- 1) 高橋・岡澤(1994)によれば、「よい体育授業を成立させる条件」は、授業の基礎的条件と内容的条件の二重の構造から成り立っている。基礎的条件は、学習の勢い(マネジメント、学習規律)と学習の雰囲気(肯定的な人間関係、情緒的解放)を指し、主に教師行動によって規定される。一方、内容的条件は、授業の目標・内容・教材・方法を指し、主に教材づくりによって規定される。
- 2) 本研究で対象とした中等体育科指導法演習は、中学校教諭免許状(保健体育)の取得にかかわる授業科目であるが、受講生の中には小学校の教員を志望する学生が多くいること、教材づくりの原理や授業省察という点では校種間で大きな差異がないことを踏まえ、小学校段階を想定した模擬授業も実施している。
- 3) プレルボールとは、バレーボールと同じくネット型に分類されるゲームであり、攻撃の組み立て方(連係プレイの仕方)や守備の陣形の取り方がバレーボールと類似している。触球する前にボールをバウンドさせることを許容していること、コートサイズが小さくかつネットの高さが低く設定してあることが特徴として挙げられる。
- 4) 形成的授業評価法とは、児童・生徒の心情から授業の成果を問う質問紙による調査の手法である。調査票は9つの質問項目で構成され、「成果」「意欲・関心」「学び方」「協力」の4つの次元に分類される(高橋ほか, 2003)。

謝辞

中等体育科指導法演習の授業の実施にあたってご協力いただいた信州大学 e-Learning センター長野分室 ICT 活用支援部門の皆さまに感謝いたします。

文献

- 秋田喜代美 (1996) 教師教育における「省察」概念の展開—反省的実践家を育てる教師教育をめぐる一. 森田尚人ほか編 教育学年報 5 教育と市場. 世識書房: 神奈川, pp.451-467.
- 藤田育郎 (2011) 大学における模擬授業の手法とその成果. 日本体育科教育学会編 体育科教育学の現在. 創文企画: 東京, pp.239-252.
- 藤田育郎・岡出美則・長谷川悦示・三木ひろみ (2011) 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討—授業の「省察」に着目して—. 体育科教育学研究, 27 (1) : 19-30.
- 福ヶ迫善彦・坂田利弘 (2007) 授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法的検討. 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 32 : 33-42.
- 長谷川悦示 (2003) 筑波大学の体育授業実習例. 高橋健夫編著 体育授業を観察評価する—授業改善のためのオーセンティック・アセスメント—. 明和出版: 東京, pp.145-151.
- 日野克博 (2004) 愛媛大学での実践的検討. 大学・大学院における体育教師教育カリキュラム及び指導法に関する研究. 研究代表者 高橋健夫. 平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書 : 103-111.
- 木原成一郎 (2010) 模擬授業の意義と方法. 梅野圭史ほか編著 教師として育つ—体育授業の実践的指導力を育むには—. 明和出版 : pp.40-42.
- 松野浩平・鈴木真理子・宮田仁・神月紀輔 (2011) 教員養成課程のマイクロティーチングにおける LMS を用いたコメント活動の検討 : 理科教育法を対象にして. 日本教育工学会論文誌, 35 (1) : 83-93.
- 三木ひろみ・長谷川悦示・高橋健夫 (2004) わが国の教師養成の現状と課題. 大学・大学院における体育教師教育カリキュラム及び指導法に関する研究. 研究代表者 高橋健夫. 平成 13 年度～平成 15 年度科学研究費補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書 : 50-58.
- 鬼澤陽子・蔵原三雪・笹本重子・山梨雅枝・岡島彩映 (2012) e-ラーニングの活用による授業の省察力育成を目指した大学模擬授業のシステムの構築 : 学内附属施設との連携を通して. 日本女子体育大学紀要, 42 : 71-79.
- 高橋健夫・岡澤祥訓 (1994) よい体育授業の構造. 高橋健夫編著 体育の授業を創る. 大修館書店 : 東京, pp.9-24.
- 高橋健夫・長谷川悦示・浦井孝夫 (2003) 体育授業を形成的に評価する. 高橋健夫編著 体育授業を観察評価する—授業改善のためのオーセンティック・アセスメント—. 明和出版 : 東京, pp.12-15.
- 梅垣明美 (2007) 保育者養成プログラムにおける模擬授業の効果について. 浅井学園大学短期大学部研究紀要, 45 : 15-24.

(2012年12月21日 受付)

(2013年2月21日 受理)